彼方【かなた】

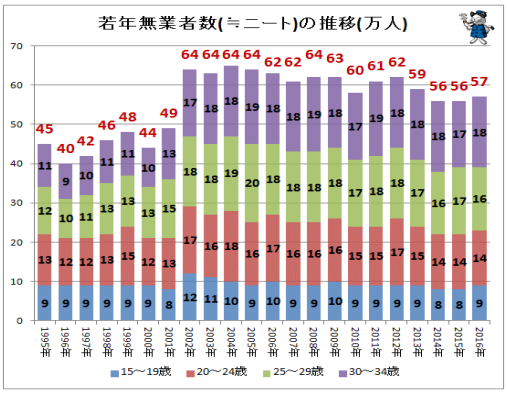
校長通信
H29.10.11
Vol.16

【進路保護者会で伝えたかったこと】

第二回進路保護者会を開催しました。お忙しい中本当に多くの保護者の皆さんにお集まりいただきました。その中で次のようなお話をさせていただきました。

進路実現は中学校で最も大きな自己決定の場だと思っています。ところが年々、自分で決められなくなっている生徒が増えているような気がします。「どうせ自分なんか…。」「自分には絶対に無理！」「そんなのできるわけない。」というように最初からあきらめの言葉が口から出てしまう生徒が少なくないのです。「そんなことないよ！」「大丈夫！できるから。」という周りの励ましの言葉ではどうにもならないほどネガティブな思いに包まれてしまっています。これは、二十歳までに十四万六千語の嫌な言葉、ネガティブな言葉を（一日平均二十回）浴びせかけ続けられてできあがったメンタルブロックという心理的な壁が作られるからです。その結果、「七五三現象」という問題にもつながっているように思います。これは、新卒の学生や生徒が三年以内で離職してしまう割合を示している数字です。中卒の離職率が七割、高卒が五割、大卒が三割という傾向が長く続いています。前向きな理由ならよいのですが、「こんなはずじゃなかった。」「こんなことをしたくてこの会社に入ったんじゃない。」「もっと自分にあった職業が別にあるはず。」という思いで辞めていく人も少なくないのです。いずれにしても三年以内で辞めてしまう若者の数の多さにはビックリです。「石の上にも三年！」という話しは通じなくなってきているのでしょうか。耐性がなく、打たれ弱かったり、根気が続かなくなったりしているのでしょうか。

厚生労働省の統計では、三十五歳までで、無業者（ニート）数がバブル経済崩壊後から六十万人ほどで推移しています。この背景には、社会環境の変化だけでなく、子どもたちの成長・発達に関する課題、高学歴社会における進路の未決定傾向などがあげられています。



そこで、進路決定にあたり、二つのことをお願いしましたす。一つ目は、**「子供の話をよく聴いて欲しい。」**ということです。「なぜその高校を選んだのですか？」この質問に明確に答えられる生徒が実に少ないのです。「塾で言われたから」「お前の力にあってると親に言われたから」「先生に紹介してもらったので」等など、これでは、就職したときに出てくる「こんなはずじゃなかった」「こんなことがやりたくて選んだんじゃない」といった同じ言葉が聞こえてきそうです。なぜその高校に進学したいのか、高校に入ったら何をしたいのか、どんなところにその高校の魅力を感じたのか、そこに合格するために自分に必要なことは何か、いつまでに何をどうするのか等々、否定せずに聴いてあげて欲しいと思います。

二つ目は、**学校（担任先生）とよく連携**して欲しいということです。進路に関して学校で話していることと、家で話していることのすり合わせをしたり、調査書の内容を相互確認したり、家庭と学校での取り組みを明確にしたり、「…したつもりだった」は禁句です。お互い同じ方向を見て支援していきたいと思っています。

最後にメンタルブロックを打ち破る秘訣を、ノーベル賞もうわさされるほどの最先端の遺伝子工学を研究されている筑波大学名誉教授の村上和雄先生は次のようにおっしゃっています。「人間は、自分の持つ能力の数％しか使っていません。もし眠ったままの遺伝子のスイッチをＯＮにすることができれば多くの可能性を生み出すことができます。いくつかの実験でわかったことは、そのスイッチを入れる方法のひとつが、**笑顔を作ることや前向きな言動をとることです。**」笑いが病気を治すのも、思いの強さが夢の実現に近づけるのも、遺伝子のスイッチがＯＮになった状態で行動するからなのだそうです。高校説明会もそのスイッチを見つけるためのひとつなのです。